

海外で経験重ね 世界で通用する薬剤師になれ

女性が子供を産みたいと思える国づくりこそ
日本の明るい未来を担保



東京大学名誉教授、
政策研究大学院大学名誉教授、
東海大学特別名誉教授
日本学術会議会長、
内閣特別顧問などを歴任

黒川 清氏

UCLA、東京大学、東海大学で教鞭をとり、福島原発「国会事故調」委員長を務めるなど、日本の学術・科学技術振興に精通する黒川清氏。その黒川氏が日本学術会議の会長を務めていた2006年、薬学教育は6年制に移行しました。アメリカで14年余を内科医として診療、教育、そして研究を続ける傍ら、アメリカの薬学教育を見てきた黒川氏は、「6年制に賛成だった」と振り返ります。自らの留学経験を踏まえ、薬剤師も海外に渡ることによって世界から日本を見つめなおし、世界で通用する薬剤師に脱皮してほしいとハッパを掛けます。

ネット社会はモノ真似人間ばかり作った

長い間、教育に携わってこられました。わが国の高等教育をどのように見ておられますか。

黒川 薬学教育は2006年から6年制に変わりました。私は、アメリカで医師として14年間、薬学教育を身近

に見てきましたので、6年制への移行に賛成でした。アメリカでは、高校を卒業して医師になるには8年かかります。4年制大学を卒業した後、大学院に相当するメディカルスクールに4年間、通わなければならないからです。驚くべきことに、こうした制度が始まったのは今から100年以上前です。建国から150年余りで医学教育8年制を確立していたのです。一方、宗教的な迫害からメイフラワー号で新大陸に逃れた人々の母国・イギリスのオックスフォード大学は、11世紀末に礎が形づくられたと言われていいますから1,000年の歴史があります。ケンブリッジ大学の起源は12世紀です。では、1,000年も前に、なぜ大学という高等教育が必要だったのか。恐らく、国のエリートや貴族の子女（ほとんど男子）を教育・育成し、強い国づくりのために必要だったはずで

す。15世紀、グーテンブルクが活版印刷技術を発明しました。印刷技術の進歩は、エリートの高等教育にも大きな影響を与えたと私は考えています。多くのメモ、バイブルや書物を印刷できるようになったから、遠く離れた人の考えを知ることができるようになりましたし、自分の考えを広めることも可能になったわけです。確かに、当時は文字の読める人間は限られていたでしょうが、高等教育を受けた者とか、王族・貴族・神学者などには情報が広がりやすい環境になった。活版印刷から始まった情報伝達技術は今やデジタル、インターネットにまで発展し、情報が溢れ返る世の中になった。その結果、何が起こったか。人のモノ真似ばかりする人間しかいなくなってしまうました。特に日本では自分で考え、行動する人が少なくなった。独創的な考えを創り上げている人間なんて、めったにお目に掛かれなくなりました。嘆かわしいことですが、東京大学の

学生が才能を生かしている場面があるとしたら、それはテレビのクイズ番組です。

戦後、日本はノーベル賞の受賞者を数多く輩出しました。どのような方々かというと、ほとんど日本国内では「異端の人」です。学者の世界のヒエラルキーで、トップに駆け上がった方々ではありません。変人だけれども、自分の好きな研究だけは一途に続けた学者です。例えば、二酸化炭素濃度の上昇が地球温暖化に影響するという予測モデルを発表し、2021年に物理学賞を受賞した米プリンストン大学の真鍋淑郎さんは、「日本の研究室では、お互いに言いたいことを言い合えないから嫌だ」という主旨を語り、日本に帰らない理由を率直に話されていました。

私も、内科医としてアメリカに行って10余年のキャリアを過ごしたお陰で、日本のおかしな部分が見えるようになりました。その意味では健全な愛国心を育むことができたと考えています。私がアメリカに渡った頃は、ベトナム戦争の真っ只中でした。これは北の勝利となり、米国へ漁船などに乗って南ベトナムを逃れる、いわゆる「ボートピープル」と呼ばれる人々が数多くいました。彼らに対し日本は入国を拒否しました。それをアメリカで聞いて私は恥ずかしかった。多くの日本人は「それで良いんじゃないの」くらいにしか受け止めなかったのでしょうか、そこが日本の弱さであることを分かっていたいなかった。私が口を酸っぱくして若者に言っているのは、留学の勧めです。中学か高校時代に、例えばアメリカに渡ったとしたら、恐らくアメリカの大学に進むことになる。そこで友達を沢山作って、アメリカから日本を眺めたら、日本の変なところ、弱いところが幾つも見えてきます。

薬剤師自らが自分たちの役割構築を

現在、薬局薬剤師は18万人います。どのような役割を期待しておられますか。

黒川 随分、多いですね。確かに薬剤師は社会に欠かせませんが、医師も欠かせない。だからと言って、医師をどんどん増やせという理屈にはなりません。ですから医学部入学の学生数は政府で決められています。薬剤師も同様です。18万人もいるのですから、その役

割を自覚する必要があると思います。ただでさえ、医療費の高騰が社会問題となっているのですから、薬剤師自らが自分たちの役割を構築していくことが何より重要です。皆保険制度でフリーアクセスが担保されているわが国の医療制度では、患者は風邪程度でも大病院に行ってしまう。今は紹介状がなければ特別な初診料を取られますが、制度としては直接、大病院に行っても構わないという立て付けになっています。

まず、この仕組みを変えなければなりません。

先ほど話したように、薬科大学に通っている学生も、1年間ぐらい休学して、アメリカやヨーロッパなど海外に出てほしい。何も、留学でなくても良いのです。NGOに参加するのも良い。海外に行って自ら体験することに価値がある。そこから日本の医療制度の良いところ、弱いところが分かってくるはず。今回のコロナ禍で、アメリカの薬局薬剤師がワクチン接種を行っていることが広く知られるようになりましたが、その他の国では、薬局薬剤師がワクチンを打っているのかどうかなど、調べてみるだけでも目が世界に広がります。

言うまでもなく薬剤師免許は国家資格です。ただ、勘違いしないでほしいのは、国内で仕事ができるからといって、それで満足してはダメだということです。日本のプロではなく、世界で通用するプロになってほしい。そうした大きな志を育てられる環境に、自らの身を置く努力が大事だと思います。しかも、日本の薬剤師は優秀ですから、日本にとどまっている必要はありません。アメリカでも中国でも行って、プロとしての

自覚、腕を更に磨いてほしいと思います。私は医者だから分かるのですが、腕の良い医師というのは、必ずしも大学教授ではありません。例えば、外科で確かな腕を持っているのは、数多くの手術の経験を持っている医師です。医師に限らず、人にとって大事なものは経験です。

黒川先生ご自身は、薬局に行く機会がありますか。

黒川 もちろん、たまには薬を貰いに行きますよ。私が通っている薬局には4~5人の薬剤師が働いているのですが、こんなに多くの薬剤師が必要なのかと、行くたびに感じています。たぶん、患者には見えない場所で多くの仕事をしているのだらうと想像していますが、これだけ多くの薬剤師、あるいはコンビニよりも多い薬局の数を国民が本当に望んでいるのかどうか、冷静に考え直す時期が来ているように思います。医薬分業が広く普及して、一見、国策は成功したかに見えますが、賛成の声ばかりではないことも認識する必要があると思います。

DXは30年前に始まっていた！

今後、人口減少が進み、併せて高齢化が進みます。明るい未来が描けないような気がします。

黒川 現在、100歳以上の人口は約9万人に達し、そのうち約90%が女性です。一方、65歳以上は総人口の29%に達しています。高齢者が増えることは良いことなのですが、比例して、子供が増えなければ日本は衰退してしまいます。

どうして子供が増えないのか？簡単です。女性が子供を産みたいと思える社会ではないからです。女性の収入は男性よりも低く抑えられ、子供を育てるための社会的な支援制度・施設も少ない。結婚してもしなくても、女性が「子供を2~3人欲しいな」と思える社会でなければ、国民は幸福感を得られません。いつまで経っても、戦後の窮乏感から逃れられていない。このまま子供が増えずに、高齢者だけが増え続けたらどうなるのか。これが日本の最大の問題なのに、これを声高に叫ぶ政治家も少ない。この30年間、国内総生産(GDP)は増えていないことを見ても明らかなように、

魅力のない国に成り下がってしまったから投資対象にもならないのです。

最近、DX(デジタルトランスフォーメーション)という言葉が流行っていますが、そんなものは1995年にマイクロソフトがWindows95を発売した時から始まり、急速に世界中に広がっているのです。今から30年近く前です。日本は、下請けを多数つくることでモノづくりを進めてきた成功体験から抜け出せず、デジタル化やネット社会に乗り遅れた。だからGDPが伸びなかった。原因は明らかなのです。別の表現をすると、日本人は形のある物を薄く・小さく・軽くする技術に長けています。一方、デジタルのように形がなく見えないものが苦手なのです。デジタル化に乗り遅れた日本は今後、そのデジタル技術で復活を試みようとしても難しいでしょう。30年間にデジタル先進国との差を大きく付けられてしまったからです。私は、切り札は女性だと思っています。女性が生きやすい、活躍しやすい国を作ることが、日本の明るい未来を担保すると私は信じています。